編集後記

15号を無事出すことが出来てほっとしている。今号も「慰安婦問題の最終的決着」「朝鮮人戦時労働者研究の現状と課題」という二つの特集のもと、内容が豊富な論文をそろえることができた。

特集１は、6月15日と16日に東京と大阪で本研究会が主催した朱益鍾著『反日種族主義「慰安婦問題」最終結論』出版記念講演会での朱先生の講演と、7月10日に東京で行われた「第三回 慰安婦問題を巡る国際シンポジウム2024」（主催：国際歴史論戦研究所）での李栄薫先生の基調講演と私の提出論文を掲載した。

慰安婦シンポは本研究会は協催という形で参画し、私の他、ジェイソン・モーガン副会長も発表者として登壇した。なお、同シンポではマーク・ラムザイヤー教授も基調講演をされたが、その内容は月刊『正論』10月号に収録されているのでぜひ、そちらも合わせて読んでほしい。

特集タイトルのように、歴史学上の論争としては、「慰安婦は性奴隷ではなく公娼だった」という最終的な決着がついたと考えている。それを受け入れない学者たちはぜひ、朱先生の緻密な実証研究に反論を寄せて欲しい。それが日本でも韓国でも一切ないのだから、最終決着だ。

しかし、李栄薫先生の講演や拙論文が主張するように、いまだに韓国や米国、国連などの国際社会では性奴隷説は幅をきかせており、公娼説に立って英語で学術論文を書いたラムザイヤー教授は、米国の歴史学会から袋だたきに遭った。歴史認識問題としての慰安婦問題はまだ決着がついていない。本研究会は今後も、慰安婦の嘘を広げ利用してきた内外の嘘勢力との戦いを続ける所存だ。

嘘勢力との戦いは、特集２で取り上げた朝鮮人戦時労働者の問題でも続いている。ぜひ、今号掲載の３つの力作論文を読んでほしい。そして、ぜひこの問題でも学術論争を行いたい。強制連行、強制労働説に立つ方々からの反論を待ちたい。

その意味で本研究会の若手ホープである長谷研究員が、強制労働派のリーダーの一人である竹内康人氏の著書を批判する書評を、今号に載せたことに注目して欲しい。ぜひ、反論をお待ちする。（西岡）

本会HP及び169頁の訃報でも紹介したように、本会顧問の伊藤隆先生（東京大学名誉教授）が、さる8月19日に91歳でお亡くなりになった。

先生は言わずと知れた日本近現代史研究の第一人者で、『木戸幸一日記』を始め、近現代史研究に欠かせない第一次史料を多数発掘し、公刊したことで知られる。

日本の教科書が左傾化していることに危機感を持っておられ、晩年は育鵬社の中学歴史教科書『新しい日本の歴史』の監修などにも携わった。歴史家としての実証主義と日本人としての愛国心が同居する、類い稀な方だった。

その伊藤先生が将来を嘱望した歴史家の一人が、本会副会長の江崎道朗氏である。そこで急遽江崎氏に、先生についての個人的思い出を中心に、ご執筆頂くこととした。

伊藤隆先生のご冥福を、心よりお祈りする次第である。（勝岡）

歴史認識問題研究
（年２回発行）
第15号（令和６年秋冬号）
発行日：2024年9月20日
発行人：西岡　　力
編集人：勝岡　寛次
編集部：歴史認識問題研究会
頒　価：1,000円
発行所：〒277-0065　柏市光ヶ丘2丁目1番1号
公益財団法人モラロジー道徳教育財団
西岡　力　研究室
Tel：04-7173-3197　Fax：04-7173-3199
印刷所：株式会社 長正社